人戀し灯ともし頃をちる櫻　同

蚊柱や粟の花の散るあたり　曉臺

或は斬新或は穩健或は纖細或は艶妖、何れもそれ〴〵の趣あり。然れども蕪村の奇峭卓拔にして且つ詩趣に富めるは優に一頭地を抽くものとやいはん。天明三年十二月歿しぬ。享年六十有八。其の句を集めたるものに『蕪村全集』『蕪翁句集』『蕪村句集後編』等あり『蕪村文集』とて俳文を集めたるものあり。蕪村また繪畫をも嗜みて其の道に於いても優に一家を成せりき。

第六節　淨瑠璃附脚本

淨瑠璃の起源　小野阿通　岡清兵衛　金平本　近松門左衛門

時代物と世話物　門左衛門の傑作　竹田出雲・近松半二等

福内鬼外　脚本　專業の狂言作者　櫻田治助　鶴屋南北

並木五瓶

淨瑠璃は、もと『平家物語』を基とし、舞の歌に說經の節などを撮合して作り出せる一種の叙事詩なり。こは室町時代の末葉に『平家物語』に擬して作りたる『淨瑠璃十二段草子』といへる物語體の叙事詩に濫觴せり。

『十二段草子』は源義經舍那王丸と呼びし時鞍馬を出でゝ奥州に下らんとし其の途次三州矢矧の長者の家に宿を取り長者の女淨瑠璃姫といへるに相逢ふ事を十二段(チ)に綴りたるものなり。其の十二段に切りたるは即ち『平家物語』の十二卷に倣ひしなり。作者は織田信長に仕へたる小野阿通なりといふ說あれども輓近の研究に據れば織田氏以前に淨瑠璃の如きものありきといへば未だ眞僞の如何を知るべからず。淨瑠璃の名のみは蓋し此

(チ)十、淨瑠璃御前まうし子の事。　二、花揃の段。　三、美人揃の段。　四、そとくわけんの段　五、笛の段。　六、さかひの段。　七、しのびの段。　八、淨瑠璃枕問答。　九、やまと言葉の段。　十、御坐うつりの段。　十一、ふ

の草子より出でたるなり。

淨瑠璃は其の初は之を語るに只扇を叩きて拍子を取りたるものなりしが後三味線の渡來するに及びて之に和することゝなれり。かくて大に世の人の嗜好に投じ遂に『淨瑠璃十二段』の外『八島』『高館』『小袖曾我』等の如き舞の歌さては『文正草子』『鉢かつぎ』『酒呑童子』等の御伽草子をさへ淨瑠璃の節をもて語るに至れり。

然れども此の時代の初に在りては淨瑠璃の作極めて稀にして多くは在來のものを梓行するのみなりき。寛文・延寶の頃に至り岡清兵衛といふもの江戸に出で時俗の武勇を好むに乘じて膂力絶倫なる勇士の事蹟を綴りしかば其の作大に世に行はれたり。所謂金平本と稱するもの是れなり。當時櫻井丹波少掾などいふ淨瑠璃語ありて二尺許の鐵棍を揮ひ拍案擊節してこれを演せしかば聽く者皆齒を軋り腕を扼して金平の名を稱せざるはなく終に本の名としたるなりとぞ。『金平法問論』『金平天狗問答』『金平千人切』『金平化粧問答』等の作あり。通編大抵

さても其後てんちやうちきう、民安くおさまる春こそゆたかなれ。爰に本朝六きあけの段。十二、御曹子あづま下り。

(り)永祿の頃琉球より蛇皮を以て張りたる二絲の樂器渡りしが泉州堺の盲人中に路といふものゝに一弦を補ひ今の如く三絃となしぬ。これを三味線と云ふ、蓋し蛇線皮の轉訛したるならんといふ。

十九後しゆじやくゐんと申奉り、めでたきみかどおはします。ころしも正月七日の御祝ひ大じん女官袖をつらねてしかふ有。扨又ぶけのとうりやうにはいよの守よりよし、坂田わたなべ御供にて、きゞとしてしこふ有。かく御いわゐのぎしき中ば成所にふしぎや御まへにかざられしほうらいの内よりしろきねずみとび出れば、御みすの内なるてがいのからねこ、つな引切とんて出る。かの鼠をあさましとおつかけおつつめ、すでにかうよと見る所に、ねずみかへつてかのねこをさん〳〵にくいふせて、ねずみはいきをひすさまじく、行方しらずぞうせにけり。君を始くげ大臣是はふしぎの次第かな。いか樣あやしき時のけい、いかゞあらんとせんぎ有。うちよりのせんじには、それ〳〵あべの安宗にうらなはせよと有りければ、畏て候と御前に召出す。

といへるが如く怪力亂神を語らざるはなし。爾來此の種の作の公にせらるゝもの幾百種京にも大阪にも江戸にも普く行はれたり。然れども其の想の幼稚なる其の辭の稚氣ある到底見るに足らざるなり。貞享の頃浮世草紙俳諧等に名を得たる井原西鶴の如き『凱陣八島』などいへる淨瑠璃を作りしかども未だ稱するに足らざりき。これを『淨瑠璃十二段草子』の當時に比するに只多少の進境あるを認むるのみ。

かくて貞享元祿の交近松門左衛門非凡の天才を以て大阪に出でゝ淨瑠璃の上に一機軸を出すに及びて斯界はこゝに空前絶後の偉觀を呈するに至りぬ。

門左衛門は本姓は杉森、名は信盛、巢林子又は平安堂の號あり。長州萩の人なり。幼にして肥前唐津の近松寺に入りて剃髪し古淵と號しき。博覽多識遙に群を拔く。古淵以爲らく「一寺の主は凡俗に異ならず、衆生を濟度せんと欲せば豈に唯圓頂法衣のみならんや」と京に上りて還俗し一條家に仕へて從六位となる。博く朝典に涉り兼て古學を修めつ。其の後幾もなくて職を辭し名を近松門左衛門と改め歌舞伎芝居の都萬太夫・淨瑠璃太夫・井上播摩掾・宇治加賀掾等の爲に淨瑠璃を作りしが貞享三年竹本義太夫筑後掾の爲に始めて『出世景清』を作りぬ。これ門左衛門が三十四歳の時なり。門左衛門が淨瑠璃の革新は此に始まりたるなり。これより先門左衛門に數種の作なきにあらずと雖も所謂金平本の跡を追へるもの、今は體裁大に改まり全編を五齣とし首尾一貫して脚色整然たるものとなしぬ。怪力亂神を語りしもの今は專ら題を人事に採りて時に人情の熹微に觸れんとす。阿古屋が嫉妬の念に驅られて大事を破り景清が一旦歸服するものから賴朝の後姿を見て忽に其の刀を拔きたる如き人間の極めて有りがちなる性情を語るものにあらずや。然れども、こは辭想共に未だ大作と見るべきものにあらざるなり。

元祿三年門左衛門京を去りて大阪に下り竹本座に入りぬ。竹本座は操人形を演ずる劇場なり。操人形の演技に合せて語りたる淨瑠璃の作者として劇場裡の人となりしは門左衛門にとりて如何ばかり便宜なりしか。蓋しかれが述作上の工夫はこれによりて得るところ少なからざりしなるべし。此の頃より諸作漸く圓熟の境に入りぬ。爾來專ら義太夫の爲に淨瑠璃を作りぬ。其の數およそ百種に上れり。『雪女五枚羽子板』(寶永二年)『國姓爺合戰』(正德五年)『曾我會稽山』(享保三年)を世に三傑作と稱ふれども『冥途飛脚』寶永八年)『心中天網島』(享保五年)『女殺油地獄』享保六年)など却て稱すべし。

享保九年十一月二十二日其の最後の作たる『右大將鎌倉實記』其の年十一月四日場に上せらる)を殘して逝りぬ。年七十二。世は當に德川八代の將軍吉宗最盛の時なり。門左衛門始めて淨瑠璃の述作に筆を染めてより爾來四十有餘年、就中後の三十年間はかれが獨特の技倆を發揮せる時期とす。

門左衛門の淨瑠璃はこれを二種に分つことを得。其の材料を史上の事實に採れるものを時代物といひ、現時の出來事に採れるものを世話物といふ。門左衛門はじ

常緣が武人の身にして歌界に重きを致しゝこと斯くの如し。されども、詠歌はさまで俊秀なるところありしにあらず、多少眞情の流露するものある外聲調平板にして、着想はた常套なるを免れず。例へば、

夏月

いりあひの鐘聞きすてゝ見るほども、あかずかたぶく夏の夜の月

島雪

すみよしの松のあらしの音さえて、淡路の島に雪を見るかな

の如きを見ても知るべし。想ふに、常緣の斯界に尊重せられたる所以は、主として彼れが古今傳授の如き歌道の舊典例に通せりしによるめり。作家としてさまでの技倆ありしものにあらず。

常緣より少しく後れて、冷泉政爲(二一〇七—二一八三)、後柏原天皇(二一二四—二一八六)西三條實隆(二一一五—二一一九三)等、最も世に知られき。政爲に『碧玉集』後柏原天皇に『柏玉集』實隆に『雪玉集』といふ家集あり、世に三玉集と呼ばれて珍重せられき。就中『雪玉集』最も行はれぬ。實隆は啻に和歌を弄びしのみならず、又詩賦・連歌等にも巧なりき。其の歌の風姿多くは纖麗、能く當時の風を代表するに足る。家集及び『高野參詣日記』の外『源氏細流抄』の著あり。其の子公條(二一四七—二二二三)はた歌文に長じき。公條の著書に『石山紀行』『吉野詣記』『源氏明星抄』等の名稍、高し。

ゝに消へて行く夢の夢こそ哀れなれ。あれ數ふれば曉の七つの時が六つ鳴りて殘る一つが今生の鐘の響の聞きをさめ寂滅爲樂と響くなり」といへるを見て門左が「妙處此中に在り外は是れにて推測るべし」といへりきとぞ。ここに『天の網島』の一節を抄して參考の料とせん。

治兵衛眼を押拭ひ、悲しい涙は目より出、無念涙は耳から成共出るならば、云はずと心も見すべきに、同じ目より溢るゝ涙の色の變らねば心の見へぬは尤も〳〵、人の皮着た畜生女が、名殘も絲瓜もなん共ない。意恨ある身すがらの太兵衛金は自由妻子はなし、請出す工面しつれども、其時迄は小春めが、太兵衛が心に隨はず。少も氣遣なされな。假令こなさんと緣切れ添れぬ身に成たり共、太兵衛めには請出されぬ。若し金せきて親方から遣るならば、物の見事に死んで見しよと、度々詞を放ちしが是や、のいて十日も立ぬうち、太兵衛めに請出さるゝ腐れ女の四足めに、心は夢〳〵殘らぬ共、太兵衛めが隱言吐、治兵衛身代息盡ての金に手詰つてなんどゝ、大阪中を觸廻り、問屋中の突合にも面をまぶれ生耻かく、胸が裂くる、身が燃る。ヱヽ口惜い、無念な、熱い涙血の涙、ねばい涙を打越へ、熱鐵の涙が溢るゝと、どうと伏て泣ければ、はつとおきんが興さめ顏。ヤア夫なれば最愛や小春は死にやるぞや。ハテサテなんぼ利發でも流石町の女房じやの。あの無心中者なんの死なふ。灸をすへ藥呑で命の養生するはいの。いや左樣でない、私が一生云ふまじとは思へ共、隱し包でむざむざ殺す其罪も怖ろしく、大事の事を打明る。小春殿に無心中芥子程もなけれ共、二人の手を切せしは此さんが機關。こなさんが浮々と死ぬる氣色も見へし故、あまり悲さ。女は相見互ひ事、切れぬ所を思ひ切、良人の命を賴む〳〵とかき口說た文を感じ、身にも命にもかへぬ大事の殿なれど引かれぬ義理合、思ひ切との返事私や是守に身をはなさぬ。是程な賢女がこなさんとの契約違へ、おめ〳〵太兵衛に添ふものか。女子は我人一むきに思ひ返しのないもの死にやるはいの〳〵、アヽアヽ瓢な事。サアサアサ何卒助て〳〵と、騷げば良人も敗亡し、取返して起請の中しらぬ女の文一通兄貴の手へ渡りしは、おぬしからいた文な。夫なれば此小春死ぬるぞ。アヽ悲しや此人を殺しては女どしの義理立ぬ。まづこなさん早ふ行て何卒殺て下さるなと、夫に縋り泣沈む。夫とても何とせん。半金も手附を打繋とめて見る斗り。小春の命は新銀七百五十匁呑さねば此世に止むる事成ず。今の治兵衛が四ッ三貫匁の才覺打みしやいても何處から出る。なふ仰山な夫で濟ばいと安

しと、立て箪笥の小抽匣（ヒキダシ）明けて惜氣もないませの紐付袋押開き投出す一包治兵衛取上げや金か然も新銀四百目こりや何様してと、我置ぬ金に目覺る斗りなり。其金の出所も跡で語れば知れること、此十七日岩國の紙の仕切銀に才覺はしたれ共、夫は兄御と談合して商賣の尾は見せぬ。小春の方は急なことそこに四々の一貫六百匁と、ま一貫四百匁と大抽匣の鎖明けて、箪笥をひらりと飛八丈、京縮緬の明日はない良人の命しら茶うら、娘お末が兩面の紅絹（モミ）の小袖に身を焦す。是を曲ては勘太郎が手も綿もない袖なしの、羽織も交て郡内の仕末して着ぬ淺黄裏、黑羽二重の一張裏、定紋丸に蔦の葉の、のきも退（ノカ）れもせぬ中は内裸（ウチハダカ）でも外錦（ソトニシキ）、男錫（ヲトコカザリ）の小袖迄さらへて物數十五色、内端（ウチバ）に取て新銀三百五十匁よもや貸さぬと云ことは、無い物迄も有顏に良人の耻と我義理を、一ッに包む風呂敷の中に情を籠にける。私や子供は何着いでも男は世間が大事、請出して小春も助け太兵衛とやらに一分立て見せて下さんせと、云へ共始終差俯向（サシウツムキ）しくしく泣て居たりしが、手附渡して取とめ請出して其後、圍ておくか内へ入（イル）るにしてから、其方は何と成ことぞと云れてはつと行當り、アッア左樣（ソウ）じや。ハテ何とせふ子供の乳母か飯焚か隱居成共しませふとわつと叫び伏沈む。

近松門左衛門に次いで起りしものを竹田出雲（リ）とす。出雲は竹本座の座主にて享保八年三月始めて『大塔宮曦鎧』を作り門左衛門に請うて添削せしめ、又折々其の教を受くる事ありしが門左衛門の歿後は遂に淨瑠璃作者の覇主たりき。出雲が著作の有名なるものは『假名手本忠臣藏』『菅原傳授手習鑑』『義經千本櫻』『蘆屋道滿大内鑑』『小野道風青柳硯』等あり。其の外『大塔宮曦鎧』『大内裏大友眞鳥』を始め數十種また行はれき。出雲の作には獨作したるもあれど他と合作したるもあり。これらいづれも門左衛門が晩年に物せる時代物の體裁に倣ひ專ら意を趣向に用ひ新奇を競ひたり。作中の人物に個性の認むべきものなく辭品また整はざるところあるは論なし。然れども趣向の新奇なるは能く觀客を誘ひて其の作の場に上るごとに太く喝采せられきとぞ。

出雲の弟子に近松半二（メ）あり。出雲に次いで又淨瑠璃作者の覇たりき。出雲は門左衛門の後を承けて趣向に意を用ひ新奇を競ひしが半二は更に一層を加へたる趣あり。半二はた獨作したるもあれど他と合作

（リ）出雲はもと阿波の人也。千蘆軒と號し名を清定といひき。父清一江戸に在りて清定を生みしが後京都に移りぬ。出雲が竹本座の座主となりしは寶永二年三月なり。寶暦六年十月二十一日年六十六にて歿せり。

（メ）半二は難波の儒者穗積以貫の子なり。若き時は頗る放埒なりしかども詞才に富みしかば遂に淨瑠璃作者となりぬ。寶延四年二十七歳の時「役行者大峯櫻」を作りたるを始とす。

したるも少からず。其の作また數十種、『奥州安達ヶ原』『太平記忠臣講釋』『關取千兩幟』『妹脊山婦女庭訓』『近江源氏先陣館』『本朝廿四孝』等有名なり。

これより先、西澤一風(二三二五―二三九一)紀海音(ル)(二三二三―二四〇二)並木千柳(二三五三―二四〇九)等出でゝ大阪豐竹座の爲に筆を執りにき。豐竹座といへるは竹本座に對せんとして元祿十五年竹本筑後の弟子豐竹越前少掾の創設したるものなり。一風に『本朝檀特山』『北條時賴記』『建仁寺橋供養』等あり。海音に『鎌倉三代記』『心中二ッ腹帶』『八百屋於七歌祭文』『義經新高館』『末廣十二段』等廿餘種あり。千柳の作にては『一の谷嫩軍記』最も著はる。海音は豐竹座にありて一時竹本座に於ける門左衛門に對抗せんとせしだけありて見るべき點最も多し。

此の外竹本座に三好松洛・吉田冠子あり、錦文流あり文耕堂あり、長谷川千四あり豐竹座に並木丈助・菅專助・近松東南等ありき。何れも出雲・海音等の後をうけて淨瑠璃の著作に力を盡しゝかども世の降るに隨つて其の作漸く劣り竹・豐二座倒るゝに及

(ル)海音、姓は槇並、喜右衛門又は善八と稱せり。狂歌に巧にして貞峨と號しき。嘗て和泉柿本寺の僧となりしが還俗して醫を業とし大阪に住しぬ。釋契冲の門に入りて和學を修めたることあり。元文元年法橋に叙せられき。

びては新作また見えずなりぬ。かゝる時に當りて江戸に福内鬼外出でゝ其の作に見るべきものありしは掉尾の觀なくんばあらず。

福内鬼外とは平賀源内が淨瑠璃作者としての號なり。源内は豪宕不羈の人、邊境爲すなきを見て四方に遍遊し好んで藥物本草の學を研磨し、貨殖經濟の術を以て世に用ひられんと欲せしかども不幸にして生涯知己を得ざりしかば遂に滑稽本に戲作の筆を勞するに至りしなり。源内固より深く和漢の學に通ぜずといへども機智に富み詞藻の才あり行文流るゝ如く滑稽筆に隨て出で能く世態人情に渉り看者の頤を解く妙あり。狂歌戲文共に慷慨寓意の辭多し。

源内が淨瑠璃の作に筆を著けしは明和七年の春吉田冠子の勸誘によりて『神靈矢口渡』を作りしを始とす。其後安永中に至り頻りに述作して數部を出せり。中に就いて最も世上に稱賛せらるゝは右の『矢口渡』を始め其の後編として出せる『弓勢智勇湊』『荒御魂新田神德』『嫩榕葉相生源氏』等あり。淨瑠璃の外別に經世實用の著・諷刺諧謔の作あり。『放屁論』といふ書戲文として世に知らる。

(チ)源内、名は國倫、字は士彝、鳩溪と號す。又風來山人、天竺老人、紙鳶堂森羅萬象等の戲號あり。享保十四年讃州志度浦に產れき。寶曆三年江戸に出づ。當時狂歌狂文に名を得たる蜀山平秩東作等は其の友なり。安永八年十二月十八日歿しぬ。年五十一。

當時淨瑠璃の外また別に狂言作者と唱へて歌舞伎狂言の脚本を作るものあり。脚本とは演劇の臺詞を始め舞臺の模樣俳優の動作服裝等の注意をも記したるものをいふ。從來歌舞伎狂言に用ひたる脚本は大抵俳優等の自作に係るものなりしが後に及びて俳優以外に專業の作者を出すに至りしなり。專業の狂言作者として始めて世に著はれしを彌五衞門・富永平兵衞等とす。專業の作者出づるに隨ひて脚本の發達は昔日の比にあらざりしが寶延寬曆へかけて演劇の進歩すると共に脚本も亦一大進歩を爲せり。當時江戸に於いて作業を專業とせるものに中村傳七あり。これに嗣いて津打治兵衞・掘越菜陽等數多の作者輩出せしが櫻田治助大に名あり。實に、治助(二四〇八—二四八〇)は名ありし狂言作者の先驅として揭ぐべきものなり。

櫻田治助は通稱を笠屋喜兵衞と唱へ幼名を治三郎をいひき。寬延元年江戸櫻田門外久保町に生る堀越菜陽(二三治)の門人にして俳名を左交と稱せり。寶曆八年十一月始めて中村座の見習作者として現はれたり。治助最も世話狂言の脚色に巧妙にして狂言名題角藝題及び小書にさへ妙を得て自ら一流を爲し世に櫻田風とて大に歡迎せられき。其の作に『名譽仁政錄』『碁盤忠信』『明烏花濡水』最も秀でたるものなり。

治助に嗣いて並木五瓶(ワ)(二四二一—二四八二)鶴屋南北(二四一五—二四八九)あり。五瓶の作に『平井權八吉原衢』『五大力』南北の作に『於染久松色讀賣』『四谷怪談』『隅田川花御所染』等最も名高し。其の他五瓶に十數種、南北に二十餘種の作あり。就中、南北(カ)は文を行るに放膽縱橫字義に拘泥せず趣向往々人意の表に出で觀客をして眼を驚かしむることあり殊に怪談の作に新案奇巧の妙多し。

こゝに鶴屋南北の『四谷怪談』中より一節を拔きて脚本の體裁を示すと共に作者の特質を見る料とせん。

本舞臺三間の間、正面淺黃幕、爰に百姓仕出し立並びゐる、そうばんの音にて幕明く

△「アヽ、此空合(ソラアヒ)は雪と見えるわい、降ぬうちに一稼(カセギ)やりかけやうか。○「よからうゝサアぬらくらと蛇遣はずとやりかけませう。□「アヽ、是々、其蛇で思ひ出した、アノ蛇山の庵室の話を聞しやつたか。△「聞いた段かナア恐ろしい話じやが、

(ワ)五瓶は大阪の人、通稱を吾八と云へり。並木正三に就いて淨瑠璃を作ることを學びしが明和中江戸に下りて狂言作者となりぬ。文政五年二月歿、年五十二。

(カ)南北は江戸の人、初名源藏後伊之助と改む。始は父に從ひて紺屋を職とせしが安永五年の春金井三笑の門に入りて狂言作者となりぬ。名を改めて勝俵藏といへり。文政十二年十一月歿、年七十五。

アノ庵には死靈の祟とやらが有て、内の者に鼠が附て、それは〳〵晝夜苦めるげな、何でも一通の事じやないテ。○「イヤモウこちらが身に係合(カヽリアヒ)がなくばよいじやないか、モウ此話はやめるがよい。□「どうか斯うちり毛もとがぞつ〳〵と、鼠に引れるやうな心持じや。△「サア往(イ)にませうか。皆々「サアサアござれ〳〵。と捨臺詞(ステゼリフ)云ふてわや〳〵で這入(イル)ドロ〳〵にて舞臺の切穴より心とい字の切抜を上へ引てとる、此内蝶々つがひ舞ふてゐる、ドロ〳〵打上る、淺黄幕をきつて落す。造り物(タウグダテ)まん中九尺の二重舞臺簾かけてあり、賤が一ッ家の體ぐるりになんきんの蔓這ふてある花の間になんきん所々に出來(デキ)ある庭先には誂の秋草いろいろ植ある、いつもの所に柴折戸、都て物淋き秋の景色、直に獨吟にかゝる。

唄「うたかたのあはせ鏡の月さへも影見せぬ夜に憂人のしらせか蜘の絲車

ト是にて簾を上る、お岩好みの娘の形にて絲車取てゐるこなし有て、岩「しら玉か何ぞと人の問ひし時、露とこたへよ人の身の、消るは宵の稲妻か、ありやなしやとはゝきゝの、はかなきものは現在の境界頼みなき世の有樣じやなア。トよろしく絲車をおきこなし有て、

獨吟唄「風のたよりもいづこよりそれに來つらんはし鷹や。

ト此の時ヒヨ〳〵と成り、いづこよりか鷹それてきて行燈へとまり。お岩見てこなし「いづこよりかはそれ鷹の、主はたれともしら梅の、香りとめ木やとまり木に、行儀の見ゆる鷹の有樣、餘所へはそれな尋ね來つらん。トこなし、此時かけりになり、伊右衛門鷹狩の形よろしく後より關口官藏立派なる奴にて犬を引いて出で來り、花道よき所にて、伊「それゆく鷹の行衛お穗屋の軒、慥にあれと見うけたり、枝折を問ん案内いたせ。ト合方になり。官「ネイ〳〵御秘藏の鷹なんでもあの家に、とくと見屆け參りませう。ト門口へ來て「イヤ御免下され、ちと物が問たい、頼みませう〳〵。岩「ハイ〳〵どなたでムり升へ。ト出て來て、官藏と顔見合す。官藏思入。官「ヘイ〳〵ちと物が尋ねたい○ヤア〳〵滅相もない美いものだ○イヤ何じやテ、唯今これへアノ鷹が一羽それては參らなんだかナ岩「ハイ唯今鷹はそれて參りまして、機嫌ようあれに留つてをりまするわいなア。官「ヤア〳〵ほんにあれなる行燈に留つてをるわい、是がほんの安堵致したといふもの、此由傳へん、又そもじの美い事も傳へん、何も彼も傳へて來よう、(中略)お岩以前の怪物の顔に變る、姿はやはり娘の形。岩「チエヽ怨は盡じこちの人。伊「ヤヽヽヽそちや女房お岩。岩「エヽ妬しや。ト始終ドロ〳〵にて。

鼓歌「のふうらめしやねなし事身はうきぐさの種となり。

伊「今に迷ふて。岩「我黑髪も諸かづらたゞよふ水に浮みもやらず、意恨は晴ぬこちの人ともに奈落につれゆかん、來んや來れ。伊「何をト刀を拔き切付んとするとたんにお岩姿かくす。ト大なるお岩の顏出る、トありあふ絲車火の車となる、ト所々の南京みな〳〵お岩の顏と變ること誂へあり、伊右衞門驚きよき所へ立身になる、姿消ゆるとドロ〳〵打上げる。ト右の飾付の道具みな〳〵仕掛にてどんてん。

かくの如く舞臺の模樣、鳴り物道具の配置に至るまで悉くこれを記して演劇に用ふるまゝと爲し純然たる脚本の體裁を具ふるに至りしは五瓶南北の頃より始まりしなり。脚本の多くは俳優の態度品性を察して筆を執りしものなれば作中の人物に個性の活動なく唯普通性の認めらるゝのみ。場面の變化に富みたるは時として淨瑠璃の單調なるに勝ることなきにあらず。

淨瑠璃の作者は歌舞伎狂言の榮えて操人形の衰ふると共に世に出づるもの次第に少く亦名ありしものを聞かず。狂言作者には其の後河竹新七・瀨川如皐等の二三者ありきといへども其の名を爲せるものにあらず。

第三章　散文

第一節　散文界の概況

此の時代の散文界は殊に富膽にして殆ど該文學のあらゆる種類をつくしぬ。すなはち漢學者の漢語交りの文體を以て儒教主義を敷衍するもあれば國學者の古體の文章を以て我が古學の旨を發揮するもあり。其の他小說俳文狂文等の作家彬々として輩出し其の數星辰の多き觀あり。是等の人の著作中小說以下の外に歷史傳記日記紀行隨筆評論考證の文一も備はらざるはなし。今これを叙述の便宜上左の四種に別ちて記載せんとす。曰はく和漢混和文曰はく雅文、曰はく小說、曰はく俳文狂文これなり。なほ雅文の條下に於ては併せて當代文學の一大動力たりし古學復興の來歷を略述すべし。蓋し、雅文の發生並に流行は國學者が古書の解釋語法の討究等に關係極めて密なるものあればなり。

第二節　和漢混和文

和漢混和文の製作　藤原惺窩　其の門下　林羅山
木下順庵の門下　伊藤仁齋　中江藤樹　荻生徂徠
貝原益軒　新井白石　室鳩巣

漢學は將軍家康以下德川氏歷代の奬勵を蒙り我が國未曾有の隆盛を極めたり、然れども漢文は專門家ならざるものゝ容易に解すべきものならねば文敎を弘布する必要に迫られたる漢學者は怜しくも一種の國文を製作して其の需に應じたりき。國學に漢語を混和せる文章即ち是れなり。是は前期に見えたる軍記隨筆等の文に類すと雖も一層漢文の素を加へたるもの、文法上許多の疵瑕を有せるに拘はらず亦好箇の國文たり。縱橫自在なる筆勢、跌宕雅健なる文體を以て深遠なる學理を闡明するところ往々國學者の文の散漫に失するに優り更に之を完成せんには我が國の普通文たるに最も適ひぬべきものなり。

此の時代の初に當りて專ら力を儒學に效しゝを藤原惺窩(一二二一—一二七九)とす。其の門に那波活所(一三〇八歿)菅玄洞(一二八八歿)堀杏庵(一三〇二歿)三宅亡羊(一三〇九歿)松永遐年(一三一七歿)林羅山(一二四三—一三一七等あり。就中羅山最も顯る。此の人名は信勝、後道春といへり。學問該博にして夙に幕府の顧問に備はり著書百七十餘種、中に所謂和漢混和文體の述作あり。『大學和字鈔』の如き即ち是れなり。其の文章は稍〻生硬を免れずと雖も彼の道春點と唱ふる『四書』の訓點が後に出でたる後藤點又は一齋點に比して遙に國語の格に合せるを見ても羅山が如何に國文に通じ國文の格法に從はんと努めしかを見るに足るべし。羅山の文章を集めたるものに『羅山文集』といふがあり。『徒然草野槌』は又羅山の述作せるもの、『徒然草』の註釋なり。惺窩羅山ともに和歌の作あり。

然れども所謂和漢混和文は却つて松永遐年の門より出でゝ著き發達を爲せり。遐年の門に木下順庵(一二一八—一二三五八)といふあり、名を貞幹といひき。江戸に出でゝ帷を垂れて子弟を敎授しつ。其の門に數多の學士輩出せしが雨森芳洲(一二八一—一二三六八)新井白石・室鳩巣等最も其の名高かりき。是等は何れも程朱の學を祖述せしが、朱子の學は幕府を中心として諸藩大方これを採用せしものなり。

朱子學の外當時別に王陽明の學を修めて知行合一の說を唱ふるものありき。近江國の中江藤樹(一二二六八—一二三〇九)は蓋し其の鼻祖なり。此の人始は朱子學を奉じ嚴に禮法を以て自ら持し頗る形式に拘泥し氣象峻厲にてまゝ圭角を存するもの

ありしが三十七歳の時『陽明全書』を得て之を讀むに及んで飜然形式に拘泥するの非なるを悟り知行合一の說に從ひ德行を以て人を率ゐき。世これを近江聖人といふ。其の門下に熊澤蕃山(二二七九—二三五一)といふもの最も顯れたり。蕃山は備前岡山の池田光政侯に仕へて經世治民の術を講じ大に治績ありき。著書三十餘種、悉く和漢混和文を以て之を記述せり、中にて『集義和書』十六卷『集義外書』十六卷主要なるものなり。蕃山の文章は暢達して明瞭なりと雖も平板無味なり。蕃山また和歌をも作りしが秀逸なるものあり。

此の時に當つて伊藤仁齋(二二八七—二三六五)出でゝ復古學を唱へき。其の唱ふる所、朱子學陽明學は共に後世の學なり老佛の說を交へて頗る儒學の本義を誤るところ多し、故に儒學の本義を知らんと欲せば漢代以前に溯らざるべからずといふにありき。仁齋名は維禎、京都堀河に塾を開き終身仕へずして子弟を敎授する四十餘年學徒四方より聚りぬ。仁齋の子東涯(二三三〇—二三九六)また父に嗣いで古學の旨義を發揮せり。東涯の著書六十有餘種、『鄒魯大旨』『訓幼字義』『學問關鍵』『唐官抄』等何れも和漢混和文を以て記述したるものなれども『輶軒小錄』『秉燭談』といふもの混和體の文章にて最も勝れたり。

東涯と殆ど時を同じうして荻生徂徠あり、江戸に在りて又復古學を唱へき。復古の學といふと雖も仁齋のそれと異なり、經義を明の李于鱗・王世貞などの古文辭の間に求め所謂聖人の道を以て詩書禮樂の敎に在り事功苟くも立たば心性に論ずる所なしといふにあり。徂徠頗る文辭に富みぬ。一時俊髦其の門に出で徂徠の學派隨て天下に滿ちたり。太宰春臺(二三四〇—二四〇七)は其の高足の弟子なり。徂徠の『政談』『南留別志』『蕓園談餘』春臺の『經濟錄』『獨語』は混和文を以て記したるものなり。

其の他野中兼山・山崎闇齋・淺見絅齋等漢學者として何れも知名の士なりき。德川幕府起りて僅に百年、儒學の隆盛なる眞に空前絕後なり。朱學あり古學あり陽明學あり、學者あり政治家あり著書に文章に仁義道德の道を說き經世治民の術を行へり。然れども和漢混和文の作者としては貝原益軒・新井白石・室鳩巢の三人を推さゞるべからず。

貝原益軒(二二九〇—二三七四)は通稱を久兵衞、名を篤信、別號を損軒といへり。筑前福岡の藩士なり。明曆中京都に出でゝ松永・木下・山崎等の門に遊び勤學數年の後其處に帷を下して敎授せしに從學するもの甚だ多かりき。太宰春臺は最も人を許さゞるものなりしに尙ほ益軒の博學洽聞を稱へて海內無雙なりといひきとぞ。益

軒高名の下に身を持すること謙遜、常にみづから韜晦して謹慎を主とせり。暇あれば則ち勝地舊跡を探りて其の足跡の及ばざる處殆どなかりき。著書一百餘種、皆實用を主として平易なる和漢混和文を用ひ婦女童幼といへども理解しがたからず。故に其の文謹嚴にして懇到なれども往々冗漫重複に失する嫌なきにあらず。こゝに『樂訓』の一節を抄錄するを見よ。

同じく人と生れて富貴なる人あり、貧賤なる人あり其の高下の品誠に多し。高貴なる人はおごらずして人を惠むを樂とすべし。乞食も生れ付きたる分ありて定まりたる事を悟り分を安んじて樂むべし。たとへば松は高き事數十尺に至り平地木は低き事數寸に過ぎず、同じく木なれど長短各異なれるは生れ付き定まればなり。極めて貧しき人も我分の低きを、案じて憂ふべからず生れ付かざる富貴を羨むべからず。又世に我ほどもなき人多し。我れより下なる人を見て我分を樂むべし、上を羨むべからず。又同じく人と生れたれども長壽なる人あり短命なる人あり。長き短き其品多くしてあげて數へがたし。富貴をきはめて萬の事心のまゝなる人も只命のみ心にかなはず。されども是れ又生れ付きて天命の定まれる所なれば短しとて悲しむべき理にあらず。此理に達し天命を樂んで身を終るべし。死ぬる時もし苦み悲まば平生樂めりともかひなかるべし。終りをつゝしむべし。たとへば松は千年を保ち槿花は只一日のみ、長短各異なり。是れ生れ付きて定まれる分あれば短きは長きを羨むべからず、各其分を安んずべし。

老人の兒孫を捉へて諄々として說く趣ありといふべし。逸氣奔放の氣認むべからずと雖も沈着謹嚴の體なり。紀行の文には雅醇なるものあり。

著書の中『初學訓』『童子訓』『大和俗訓』『養生訓』『家道訓』『樂訓』『女大學』『愼思錄』『大和本草』『和名本草』『花譜』『菜譜』『大和廻』『京廻』『岐蘇路の記』等最も世に行はる。『日本釋名』と題する著書は我が國語の性質根源を說きたるもの、固より牽强の辯多しと雖も實に我が國言語學に關する書典の先驅たり。正德四年八月二十七日、八十五歳にて歿せり。

新井白石(二三一七—二三八五)通稱は勘解由、初の名は璵、後に君美と改めき。幼にして岐嶷聰敏、長ずるに及びて大志あり曰はく「大丈夫生きて封侯を得ずんば死して將に閻羅王となるべし」と。順庵の門に入りて經史を攻究し勉强衆に超えたり。業成りて古河の堀田侯に仕へしが志を得ずして退きぬ。既にして德川家宣の尙ほ甲

府に在りしに徵されて儒員となり其の將軍職を拜するに及びて隨ひて幕府に入り從五位下筑後守となりて祿千石を賜はりぬ。其の所遇啻に侍講たるに止まらず寧ろ內外政府の顧問として獻策する所一として用ひられざるはなかりき。朝鮮の來聘使接見につきて彼我の名分を正せる、惡貨鑄造の改善につきて勘定奉行萩原重秀を彈劾せる、さては林信篤と將軍家繼の喪服の事を論せし如き殊に人口に膾炙せる所なり。將軍吉宗統を受くるに及び仕を致して老を明窓淨几の間に養ひ享保十年五月十五日、齡六十九にて卒せり。

白石博學洽聞にして識見甚だ高く其の施さんとする所專ら實用にありき。其の木門下に在りし時既に師の問に答へて「天下有用の學問を爲すべし」といへりき。

聖人の道は人道なれば人間日用常行の外に出でず。人とは何ぞ。君臣父子夫婦兄弟朋友なり王侯卿大夫士庶人なり。道とは何ぞ。孝德忠信禮義廉耻理世安民等の道なり。智仁勇といふも仁義禮智信といふも語かはりて實は同じ。此外に出で道を行はゞ廣大微妙を極むといふとも徒らに無用の論にして實行といふべからず子思孟子いまだ此弊を免れ難し。

これ儒の本義を說いて白石の常に主持する所たりしなり。故にかれは政治家として外交家として又理財家司法家として能く幕府の諮詢に應じて一々之を六經に質し史乘に照らして應對せり。然れども文學上に於ける白石の偉績は猶ほ之れにも勝れるものありき。著書實に三百餘種、巧妙なる和漢混和文を以て記述せるもの多し。少年の時は俳諧にもたづさはりて桐陰の號あり。詩はた盛唐詩人の性格を摹して詩趣溫雅にして華麗なり。著書の中國文學上に於て最も價値あるものを『藩翰譜』『讀史餘論』『古文通』『折焚く柴の記』とす。

『藩翰譜』は白石が甲府に在りし時君命によりて選びしものなり。元祿十四年七月稿を起し十月に完成せり。慶長五年より延寶八年に至る八十餘年間に於ける列侯三百三十七家の傳記を詳述す。其の文章は遒强にして明鬯。例へば

されども入道さる古つはものにて少しも騷ぐ氣色なく宮津の城を捨てゝ田邊の城に盾籠りかたき遲しと待居たり。抑、此入道と申すは弓矢打物とつて堪能なるのみならず、さらぬ小藝にだに達せずといふことなく天下に雙びなく多才多能の人なりけり。中にも敷島の道に深くすきて古今和歌集の秘訣悉く此人に傳はれり。されば此度我身うち死したらん後此道永く絕えなんことをかなしみ城に籠れる初相傳の書ども取集めて大內へたてまつるとて

古も今もかはらぬ世の中にこゝろの種をのこす言の葉

といふ一首の歌を添へて參らせける。丹波但馬の軍勢雲霞の如く押寄せ十重廿重に取卷きて火水になれと攻めけれど入道ちつともひるまず防ぎ戰ふ。かくては此城なか〳〵一時に攻落さるべうも見えず。烏丸の右大辨勅使として大阪に行きむかひ輝元三成等に勅諚を傳へらる。夫れ和歌は我邦の風として天地ひらけはじまりしより此方百王の今に至るまで其道長くつたはれり。然るに今いにしへの事をも歌の心をも知れる人忽ちに失せなんこと最も朝家の嘆きなり。いかにもして彼の二位法印が恙なからんやうを謀るへしと宣べられたり。輝元を初として奉行ら謹んで承りいそぎ早馬を立てゝ寄手の軍をとゞむ。もとより入道は今を最期と思ひ切つて戰ひし程に寄手たやすう引きて歸らんこと叶ふべからず。此よしまた都に聞えしかば三條西大納言綸命をふくみて丹後の國に下向ありてすみやかに勅に應じ其城を去るべしとありければ入道畏つて普天の下率土の濱王土王臣にあらずといふ事なしと承る。ましてや此微賤の身かくまのあたり寵渥の辱きをかうむるをや。さりながら入道が年若き時ならんには弓矢取る身のならひなり、敢て死を白刃の際に決して深く恩を黄泉の下に感ずる事もあるべし。今は齡既にかたむきぬ。たとへ此戰に死する事なからんにも餘命又いくばくぞや。されば惜かるまじき身なるが故に私の名譽をむさぶつて王命には背きまゐらすべきと答へ奉りてやがて城を去つて高野にぞ赴きける。

の如く錯綜せる事柄をも縱横自在に描寫して苦作の跡なし。蓋し混和文の粹なり。稍、單調に失する感あるは其の弊なるか。

『讀史餘論』は正德二年春夏の交將軍家宣の命によりて我が國古今の治亂興廢を論じたる講本なりといふ。文致は『藩翰譜』よりも劣れゝど論旨燃犀能く史論の體を得たり。或はいふ此の書北畠親房の『神皇正統記』に負ふ所多きが如しと。然れども我が國の大勢九變して武家の世となり武家の世又五變して德川氏に及ぶ所以を論明せし所治亂興亡の機微に精通せる史眼を具ふるにあらずんば如何でか此に至らん。予輩は『藩翰譜』に於ても多少かれの史家たるを認むと雖も此の書を繙いて深く其の然るを信ぜんずばあらず。

『折焚く柴の記』は白石の自傳を記せる書なり。其の文章は『藩翰譜』又は『讀史餘論』などとは少しく異なり混和體の中に雅文の趣を具ふ。多少文法上の誤謬なきにあ

らずと雖も精細にして而も流暢誦するに足る。

其の他『東雅』の國語の歴史及び語源を、『東音譜』の綴字法を、『同文通考』の假字の沿革を述べたるは語學上の意見を知るべく、『采覽異言』『西洋紀聞』等は外來語研究の資料たるべし。『古史通』は語源を本として我が古史の事實を闡明せしもの亦好著なり。予輩は此等の書によりて縱令其の說の幼稚なる所あるを發見することありとはすとも尙ほ白石は言語學者としても貢獻する所少からざりしを見る。

室鳩巢は、通稱を、新助、名を直淸、字を師禮といへり。初は加賀侯に仕へしが後白石の推擧によりて幕府の儒官となり八代將軍吉宗の優遇を蒙りき。鳩巢の號は貞亭三年加賀にて古屋を購ひ之に住みし時鳩巢と號せしに基くといふ。幕府の儒官となりしは白石の推擧による。邸宅を駿河臺に賜はりて住せしかば世號して駿臺先生と呼べり。享保十九年八月十二日年七十七にて逝りぬ。其の著『駿臺雜話』『鳩巢小說』最も名高し。

『駿臺雜話』は老後病間に筆を執りて將軍吉宗に奉りしもの、隨筆なり。記す所は「正道を明かにし邪說を辨じすべて學問の大綱に係り又は世俗の諺淺近の語といへど平生の事に通じて觀省の益ともなるべき事どもを採りあつめて」述べたるものなり。

其の文章は

燈臺もと暗し

三伏の夏もはや半過行きし頃人々すゞみがてらに駿臺の菴にとぶらひ來けり。折ふし積雨新に晴て夕日梢にのこれるに庭の竹樹露すゞしく池の芙蓉風かほりなにとなく見すぐしがたき折からなり。諸客はしゐしつゝ勾欄によりて詩歌を朗詠しけるがはやものゝあやめも見えぬばかりに暮ゆけばやがて內に入て翁にいとま申さむといふを今しばしとあればさらば宵の間過る程こゝにありて御物語承らんとて各座につきけり。しばらくありて燭もて至りぬるに翁ふとおもひよりしまゝ燭臺をさして世俗の諺に燈臺もと暗しといふはいかやうの事にたとへていふにやあらん、をの〳〵いふて見給へとあれば座客の中ひとりいひけるは世に何事にてもあれ外にはかくれなき事を其もとにてきけば却て分明ならぬやうの事にかく申し候。但我等が愚見にて是に道理をつけて申候はゞ孟子の道在邇而求諸遠といふ意にもたとへばたとへつべし。人こと に本を忘れて末をつとめ近きをすてゝ遠きに求るは常の事にて候。是を射(ユミイ)る者の的にのみ志して、あたりの手前にある事をしらぬにたとへたれば燈臺のも

とくらきにたとへても同じこゝろならんかし。亦ひとり聞てされば其事にて候羅大經が鶴林玉露に悟道といふ尼の作とて

盡日尋春不見春　芒鞋踏遍隴頭雲　歸來笑撚梅花嗅　春在枝頭已十分

是も道のちかきに在て遠きに求るたとへなり。ひねもす山野に春を尋ねくらして春はとくにわが宿の梅にある事をしらずといへるも燈臺もとくらきの意にもよくかなひていとおもしろくこそ候へ。又ひとり、道のさたばかりにも限らず外の事にもあるべし。たとへば東晉の時桓溫三秦に打入しに當て王猛來見しけるに三秦の豪傑なにとていまだ一人も見へ來らぬと問しにぞ桓溫が眼のくらきもしられけり。三秦の豪傑王猛に過たるものやあるべき眼前に豪傑あるをしらずして豪傑にむかふて豪傑を問しは燈臺もとくらきにて候はずや。又ひとり古より倭漢共に英主の遠略をつとむるが其威望遠く敵國に及へどもまちかく蕭牆のもとに敵ある事をしらざるも燈臺もと暗きにたとふべし。近代日本にていはゞ織田信長關東關西の諸國迄手をのばし討したがへられしかども手本にくらくして明智にころされし、燈臺もとくらきにあらずやといふを翁きゝてすべて比喩の語は義理のとりやうにて色〳〵に申さるゝ物にて候此諺も各たがひに其義をつくされしにてもはや此外にあるまじく覺へ侍る。但各の申さるゝはいづれも燈臺もと暗しをあしきかたにたとへらるゝにて候。翁は又此諺をよろしき方に取なしてきき度こそ侍れ。又一種の道理もあるべきにや。（下略）

の如く、和漢の故事を引用すること多く之れが爲に意味をして晦澁ならしむる跡なきにあらずと雖も森嚴にして而も興味あり。著者本書の例言にいへらく「國語大やう古雅に從ひ世俗の卑しき語を避ると雖も事情に近く人聽に切なれば、たとひ鄙しき俗語にても其のまゝ取用て擇びすつるにいとまあらず」と。本書實に雅俗の言語を書きつらねて流暢なる筆致あり。『鳩巣小說』は主として白石との談話等を記したるもの文章亦『駿臺雜話』に同じ。

鳩巣の著外に『六諭衍義和解』『五倫五常名義』あり。これ將軍吉宗の命を承けて述作せるもの、一時大に行はれき。

(ヨ)雨森芳洲また辭章明晰優麗なり。其の師順庵其の才藻卓絶を稱して後進の領袖といひたりとぞ。著書『多波禮具佐』は混和體の文章を集めたるもの、雅文の

(ヨ)芳洲名は東。木門五先生の一人なり。師の推薦によりて對州侯に仕へき。年八十一にして和歌に志し三年にして詠ずる所一萬首に及べ

調を帶びたり。

是等の人々の外中井甃庵(二三五三—二四一八)の『とはずがたり』柳澤淇園(二三六六—二四一八)の『雲萍雜誌』等亦世に名あり。

天明寛政以降は漢學者として有名なるもの尙ありしかども漢詩漢文を能くする者こそ多かれ、和漢混和體の散文に巧なるものは比較的に少かりき。只、わづかに中井竹山(二三九〇—二四六四)の『草茅危言』湯淺常山(二三六八—二四四一)の『常山紀談』菅茶山の『筆のすさび』成島司直(二四三八—二五二二)の『德川氏實記附錄』太田錦城(二四二五—二四八五)の『梧窓漫筆』朝川善庵(二四四一—二五〇九)の『善庵隨筆』橘南谿(二四六五歿)の『東西遊記』藤田東湖の(二四六六—二五一五)の『常陸帶』等の數種ありしのみ。蓋し當時の漢學者は和學者と門戸を競ひて互に相詆排すること甚しかりしかば勢ひ和漢混和文を物するものゝ少かりしにもよるべし。此の中『常山紀談』『筆のすさび』『東西遊記』の文觀るべし。漢學者にあらざれども伴蒿蹊の『近世畸人傳』閑田耕筆『閑田次筆』富士谷御杖の『北邊隨筆』山崎美成の『名家略傳』『提醒紀談』『耽奇漫錄』『三養雜記』瀧澤馬琴の『玄同放言』『燕石襍志』『烹雜の記』等また此の種の文體なり。

第三節　雅文附古書の解釋及び語法の研究

雅文家の東道　北村季吟　荷田春滿　本居宣長

『古事記傳』語法の研究　國學三大人　村田春海

橘千蔭　寛政の前後『群書類從』

歌道刷新の目的を以て古文學の研究を主唱したる下河邊長流・僧契冲・は同時に散文の復古を計りたる雅文家の東道となれり。但し此の二人及び當代の初中葉に出でたる國學者は自ら雅文を綴るを旨とせしに非ずして專ら心を古歌・古文・の解釋に委ねまゝ作る所の文やがて擬古の體をなせるもの多きを記臆せざるべからず。

長流・契冲・の二人大阪にありて國學の開發に從へると同時に江戸にありて同じく古文學の註釋に力めしものあり。これを北村季吟といふ

季吟は元和四年山城國粟田口に生れき。通稱は久助といふ號を拾穗軒又は盧庵と呼びぬ、湖月亭は其の家の號なり。初は江州北濱に醫を業とせしが後に松永貞德に從ひて國學を學び京都玉津島の社司となりき。元祿二年十二月子湖春と共に幕府に召されて江戸に移り後歌學所となりて再昌院法印に任ぜられき。博聞强記にして著書五十種に餘れり。『源氏物語湖月抄』『枕草紙春曙抄』『徒然草文段抄』『土佐

『記抄』『伊勢物語抄』『萬葉集拾穗抄』『和漢朗詠集集註』の十種は幕府に上れるものなり。吉田令世、季吟の註釋書を評して曰はく

北村季吟はおとなしき學者也。此人の著述を見るに源氏物語の湖月抄・清少納言の春曙抄・伊勢物語の拾穗抄・など皆めでたき抄物也。そはおのが私の說を言はず古說どもを丁寧にかきしるしてしかも引書は皇國はさらなり漢籍も佛書も手のとゞくだけは引出して證としたれば極たる重寶にて大に人の用をなし今より後幾年經たりとも廢れほろびむとも覺えず。但し萬葉集の拾穗抄のみは取るに足らず。

と。古書を註釋して世に流布せしめたるは實に季吟が不朽の功なり。其の『萬葉拾穗抄』の如き契冲の『代匠記』に及ばざること或は遠しとするも季吟の國文界に於ける事業は決して堙滅せざるなり。況や『湖月抄』の如き『春曙抄』の如き今に至るまで世人の重寶とするものあるをや。季吟また和歌俳諧の著書も少からず。寶永二年六月十五日年八十八にて卒しぬ。當時德川光圀の編纂せしめたる『大日本史』及び『扶桑拾葉集』はまた國文學興隆の機運を助成したるものなり。

我が國文學の復興はかくの如くにして其の端緒を開きしが正德享保の頃荷田春滿の出づるに及びて俄に旭日の勢を現すに至れり。春滿(二三二八—二三九六)は京都稻荷山の祠官にして通稱を羽倉齋といひき。人と爲り謹嚴にして氣節あり。夙に國學の替廢を慨きて眼を國史律令の學に注ぎ心を古文古歌の研究に潛め專ら古道の恢復を以て己が任とせり。國史神代の卷と『萬葉集』とに就きては特に其の創見を見る。享保の頃八代將軍吉宗世に古事の埋れたるを嘆はしく思ひ玉石共に藏して寶とするは却つて後世の害をなすものなりとて廣く諸國に求め春滿を召して甄別せしめき。春滿論辯頗る正確なりしかば吉宗深く感じ祿などを給ひて優遇しき。晩年國學校を伏見に創設せんと欲し胸算ほゞなりしが未だ果さずして病歿せり。時に元文元年七月二日、齡は六十九なりき。甥にして嗣子たりし在滿(二四一一歿)家學を承けて亦制度律令に通せしが別に妹蒼生子と同じく歌文をも能くしき。在滿に『白猿物語』『長月物語』の作あり。春滿の著書は其の說の未熟なるを耻ぢて歿前に焚棄てしかば現に世に傳はるものは甚だ少なし。其門に碩學賀茂眞淵出でて國文學上に偉勳を樹て眞淵の門より雋英一時にあらはれて益國學を天下に普及せり。就中本居宣長は註釋に心を盡し兼て村田春海・橘千蔭等と共に雅文を以て當時の國文界を風靡したり。

本居宣長(二三九〇―二四六一)は號を鈴の家といひ通稱を舜庵、後に中衞といひき。伊勢松坂の人にして初め醫を業とせしが年二十七の時契冲の著書『勢語臆斷』『百人一首改觀抄』を見て古學に志し既に眞淵の『冠辭考』を讀みて更に奮發する所あり寶曆十一年眞淵の松坂に來りしを機として其の門に入りぬ。爾後醫業の傍、心を古典の研究に委ね日夜勵精暫くも懈らず終に國史國文に就きて前人未發の見を建てたり。宣長又我が儒者の其の所從に心醉して自國を蔑如せるものあるを慨き百方辯難して國體の發揮を力めき。かくて名聲四方に轟き縉紳は延いて敎を請ふを榮とし士庶は趨いて道を受くるを譽とし弟子前後六百人業をなし名を揚ぐるもの甚だ少なからず。晚年紀州の德川侯に仕へ眷遇頗る渥かりき。享和元年九月二十九日齡七十二にて歿せり。男春庭(二四八八歿)養子太平(二四九三歿)並に父の遺業を紹ぎて家聲を墮さゞりき。

宣長の著述數十種世に用ゐられざるはなし。古歌古文の解釋には『古今集遠鏡』『歷朝詔詞解』の如きあり。『源氏物語玉の小櫛』はかの集に關する諸註の醇雜を批判せるもの、『萬葉集玉の小琴』は此の集に於ける諸家の說を評論せるもの共に卓說

(ヲ)春庭の著に『詞の通俗』『詞の八衢』及び『後鈴廼屋集』等あり。

(レ)太平の著に『古言類聚』『神樂歌新釋』『稻葉集』『藤垣內集』等あり。

多し。音韻の學に就きては『漢字三音考』『字音假名用格』『字音假名づかひ』『地名字音轉用例』等あり。其の他なほ『直毘靈』『神代正語』『玉くしげ』『初山踏』『美濃の家裏』『草菴集玉箒』『菅笠日記』『玉賀津滿』『鈴廼屋集』等あり。就中宣長の最も心力を盡したるを『古事記』の註釋『古事記傳』とす。

『古事記傳』は宣長が三十五歲の時より稿を始め六十九歲にして完成せるものなり。其の間年を閱すること三十五年、難義の考證に至りては寢食を忘るゝこと數日に及べることもありきとぞ。卷の數すべて四十四、首卷一卷、考證の精確なる能く千古の疑團を氷解するに足れり。我が國有數の大著述にして史學上は更にもいはず又文學上及び語學上の至寶たり。

宣長又別に國語の法則を研究して『詞の玉緒』『紐鏡』を作りぬ。これより先(ヲ)契冲眞淵等も古來の言語を擧げて通略延約等の轉訛あるを說き假字遣ひなどを訂正したることあり、富士谷成章『挿頭抄』『脚結抄』等を著はして活語體言の連續より繫り結び等の法則を論究して多少眼を語學の上に注ぎたりと雖も我が語法に就きて系統的の著述ありしは宣長を以て嚆矢とす。後世に於

(ヲ)契冲のは『和字正濫抄』眞淵のは『語意考』即ち是なり。語學に關して契冲は中興の祖なり。乃ち久しく亂れたる假字遣を稍々反正したればなり。

ける文法の書は實に其の基礎を宣長に負ふ所多し。

宣長の文章は『鈴の屋集』に見えたるものには巧緻なるが多く、『直毘靈』『玉賀津滿』等に載せたるには澹泊なるが多し。『鈴廼屋集』に

初時雨といふことを題にて

神無月のはじめ物へゆきけるに日いとみじかきころ、やゝとほきところにし有りければいそぎつれどかへさはとく暮れにけり。夕月の影に玉ざゝの霜のところせくおきわたしたるがきら〳〵と見えたるなど中々をかしき冬枯の野べのけしき、やみならましかばくちをしからましと思ふにも入るかたちかくかすかなるひかりのいとあかぬこゝちするに空さへにはかにくもりて山のはなら で月もかくれいみじくくらくなりて風あら〳〵しく吹きぬるはげにさだめなき此ごろの空のけしきかなと見るにはしたなくうちしぐれぬればあしをそらに走りかへるほどしとゝにぬれぬ。何とはわかねどいと大きなる木のたてるを見つけてしばしのかさやどりと頼む蔭さへいたくちりすぎにたれば雨たまるべくもあらぬにぞいとわりなきわざなりける。しばしのほどになごりもなく晴れぬれど月ははやく入りにけり。

の如き實に雅文の好模範にあらずや。『玉賀津滿』は著者一代の隨筆にして其の才學の時輩に卓越せるを見るに足る。宣長の和歌亦誦すべきもの少なからず。「おのが畫像に題して詠みける

しき島のやまとこゝろを人とはゞ朝日にはほふ山さくら花

これ其の特に人口に膾炙するものなり。宣長が平生の精神那邊にありしかを推し測りぬべし。世人、春滿眞淵宣長を併稱して國學三大人と云へども宣長の學殖識見は遙に他の二人を凌ぎ勉强成功の二點亦日を同じうして語るべからず。

村田春海(一)(二四〇六—二四七一)は江戸の商家に生れ父春道、兄春郷と倶に縣居門下に遊びて才人の名を得たり。性豪放にして治産を屑とせず家道漸く衰へんとせしが尙ほ志を屈せずして學問に精勵し終に詞章を以て名を成すに至れり。其の作る所の雅文には雄渾なる議論文あり流麗なる紀事文あり概ね波瀾起伏に富み擒縱抑揚の自在なる大に一般國學者の作と異なる者あり。試に清水濱臣がもとへ遣しける文を見よ

よろづの事いとはかなき業にても物の上手はおのづからに高き心しらひあるものにてなま〳〵の人は却つてうたがふふしあめり。そのまだしきはの人

(一)春海、姓は平、通稱平四郎、字は士觀、春海は號也。

にてはとみにわきまへがたからんこそまことのいたり深きにはあなれかの雨夜の物語に木の道のたくみと手かくことゝうつしゑの上との心ばへをいへるなどはよく其心を得たるものなり。女房のはかなき筆すさびとはいへどことゝ加ふべき事なんなかりける。今いにしへの歌ののどやかにみやびかにしらべゆるやかにたけあるをあぢはひ少くて事たらはずとして棄てゝ後鳥羽、土御門の御時などのいやしげにさしすぎて僞りたる巧ある歌を却りて前にも後にもたぐひなしなど思ふは物の上手の高き心しらひある事をば思ひもわかぬよの常のまだしききはの人の心とやいはん。かくいふはわが私の心をたてゝいふには侍らず、公のことわりなり。今より後百年をすぎ侍るとも物の心得たらん人のいで來ば必ずわがあげつらひをば改むまじうこそ。かく思ひ定め侍るにつけてもかの家づとのひがことの人まどはしなるわざなればさゝぐりと名づけて物し侍り。うちかへし讀みたまひてなほわが思ひもらせるともあらんをばこゝろみにこと加へたまひてよ。こは人のさがいふを好むには侍らずわが縣居の歌のをしへのいと高き心ばへある事を心あひたる人々の思ひまとはざらん爲にとてなすわざになん。鈴の屋の翁さばかりすぐれたる人なるに又いたくひがみたる事多きはをしむべきわざにこそ侍りけれ。歌のあげつらひのみにも侍らず、わが國の古の道なりなどいかめしくいひつゞくる事の侍るもいと心得がたきことに侍り。さる事いふにつけてはひじりの道をも佛ののりをも口さがなくいひおとしめなどするはいとあるまじき事とこそおぼえ侍れ。さてわが國の古の道といふ事いかなるふみに出でたるにか。おのがふみまむこと多からねばにやいにしへのふみにさる事記せるものは未だ見侍らずなん。恐らくは私の心に作りかまへていひ出づるにこそ侍らめ。これをもその古により所なきよしをあきらめいでゝ初學の人などのためにと思ひをり侍れどよく思ひめぐらし侍るにこは事の心とほらぬこととしるければ心をたひらかにして思はん人は誰れもわきまへぬべければおもひやみて筆おこし侍らず。歌の事はようせずば思ひまどはん人もありぬべければ言はでは止みがたうこそおぼえ侍るなれ。なほまのあたり聞ゆべき事も多し。いとま得たまはんをりにむぐらふの露ふみわけ給ひなんや。

古語を運ねて淳々として理を談ずる所縱横自在一糸紊れず整然たるあり。高田與清嘗て春海を評して詞をいにしへにとり心を今にまうけ、すがたをから國にかりて

錦を織り繡をさへよそほひて、文かく道のはしだておこされしは今むかしたぐひなき功なりけり」といひき。蓋し春海は漢學にも通曉せしを以て文則を彼の唐宋の大家に取り更に又推敲工夫し一の措辭をも忽にせざりしに因れり。是に於て時人春海を推して德川時代第一の能文家と稱揚するに至りぬ。春海まだ和歌にも巧なりしが强ひて縣門の古調を襲はず寧ろ自然に任せて平易なる詞を採用せり。歌文共に『琴後集』に收めらる。琴後翁とは自家の號なり、別に錦織齋ともいへり。文化八年二月十三日歿しぬ。時に年六十六。初め白河侯の知遇を得て月俸を受け晩に京都なる妙法院一品親王の寵を蒙りき。

著書には家集の外に『歌がたり』『時文摘紕』『錦織雜記』『和學大觀』『五十音辨誤』『椿太詣記』等あり。門人清水濱臣(子)(二四八四歿)亦雅文を能くして師の衣鉢を傳へたり。

春海の親友にして而も文壇上其の好敵手たりし者これを橘千蔭(二三九八—二四六八)とす。千蔭氏は加藤號は芳宜園又求園(うけもかその)といふ。江戸の人にして家世々與力なりき。父枝直と俱に眞淵に師事し荒木田久老加藤宇萬伎等と交れり。資性敦厚にして物と競はず善く偏急なる琴後翁を容れて終始敬愛せられき。千蔭最も歌文に長じ殊に其の雅文は輕妙にして情致に富み之を春海の作に比するに温柔にして迫らざる所酷だ其の人と爲りに類す。これを其の「初雁をきく辭」について問へ。

(子)濱臣は江戸の醫師なり。家號を泊洒舍といひまた月齋ともいへり。著書に『伊勢物語俚言解』『遊京漫錄』『萱根集』『濱臣家集』『泊洒舍家集』『泊洒文藻』等三十餘種あり。

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ獨り高き屋にのぼりて七つをの小琴をかきならしつゝ秋の風のとばをうそふき出でけるをりしも遠つ人初雁がねの聲かすかにきこゆるにおどろきてしばしひきさしつゝ見さくれば姿は雲路になん消えうせぬる。いでや白雪のふるとしよりしもはねならはしつゝかけろふの春立そむるあした日影うら〳〵とうち霞めるに軒近き篁にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより、笠にぬふてふ花のかをりみてる枝に來ゐつゝ、ほこりかにさへづるは、めでたきものから、雲にたぐへし櫻も散過ぎて、青葉しげき木の間を立ちぐゝ聲のむくつけきには、待たるゝ物はといひしに引きたかへてぞおぼゆるぞかし。池のふぢなみ夏かけてにほへる比、ほとゝぎすのそれかあらぬかとたどらるゝ一聲より、花橘のゆくりなく香ににほへる曙あり明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過ぎ行くはさらなり。小さめそぼふるゆふべ、物思ひにいをねずして更過ぐる夜はに、をち返り鳴くを、誰や

し人かあはれともおもはざらむ。しかはあれど山かたつけるわたりにはこちたきまで飛びかひつゝ梢に霜おりゐて、高やかに鳴きとよめるなどは、今一聲のといふべくあらずうれたきや。そもそも雁は常世の國をや出でけん、三越路よりは來ぬらむ。ある時は眞木たてるあら山のあしたの霧にむせびあるときはみるめ苅るやしほぢの夕の浪をつばさにかけて、草の枕だに結びあへず、天路はるかにおもひあがりて夕暮の雲のはたてに聲は小舟こぐ唐ろにかよひ、姿は薄墨にかける文字に似て一つら過行きつゝ、遠かたの田づらに落ちくるさまさへおどかにして、其時しも萩の葉におとなふ風、はぎがえに亂るゝ露くまなきよはの月染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たび打すさぶ砧の音、おしこめてあはれなるをりに逢ひぬるが、限りなくめでたくなむ。また別れていぬる春べには花を見捨つるなどとがむめれど、しづけかるみ山の花をつばさにしめんとて都の空を急ぐならむと思へばそもはたにくからずこそ。雁よ〳〵なれこそはわがおもふどちなりけれ。

われもいざ秋をあはれぶ友どちのつらにはもれじ天つかりがね

家集を『うけらが花』といふ。『萬葉集』を註釋したる書に『萬葉集略解』といふものあり。自家の考案に眞淵の說を參酌したるもの往々首肯しがたき點ありと雖も簡略に失せず冗漫に流れず頗る繁簡の要を得たり。蓋しこれ千蔭が一代の傑作後世を裨益すること少からず。別に『香取日記』『玉川紀行』『新撰月百首』等の著あり。千蔭多能にして狂歌狂文を作り丹青を嗜み筆札にも巧なりき。就中後者は其の雅文及び和歌に次ぎて世の歡迎する所となり、墨帖の刊行を促すに至れり。文化五年九月二日享年七十四にて歿しぬ。

春海千蔭の江戸に鳴るや上田秋成大阪に出で亦文章を以て一時に振ひたり。秋成(一三九三—二四七〇)通稱を東作、號を鶉廼屋又餘齋といへり。初め醫と儒とを學び加藤宇萬伎の大阪に祇役するに及び之に就きて歌文を修め遂に一家を成したり。其の文を作る頗る迅速にして法式に拘はらず興到れば一日輙ち數十編を出せり。故に行文の間まゝ流暢を缺く嫌あれども莊大にして氣力あること當時第一の稱あり。中年の頃火災にかゝりて資財書籍を失ひしより居を定めずして京師の間に飄蕩せしが晩年に世塵を京都南禪寺中に避けたり。平生狷介疎懶にして多く人と交はらず只、小澤蘆庵伴蒿蹊數輩と親しかりき。一代の奇行少からず。文化七年齡七十八にて歿せり。

秋成の著書に『冠辭考續貂』『萬葉集目安補註』『校補古今集打聽』『靈語通』『伊勢物語古意考』『よしやあしや』等あれども其の文才の非凡なるを徵すべきものは『雨月物語』『くせ物語』及び家集の『藤簍冊子』なり。但し三書ともに語格上の過失多きは讀者の留意すべきことゝす。秋成別に『諸藝聞耳世間猿』等の戲作ありて其の滑稽の才は太田南畝をして推重せしめたりといふ。

寛政の前後は最も國學隆盛の時期なりしかば詞章解釋及び語學に名を得たる者少なからず。其の尤なるものを擧ぐれば、楫取魚彦(二三八二—二四四二)伴蒿蹊(二三九三—二四六六)富士谷成章(二三九八—二四九三)其の子御杖(二四二八—二四八三)加藤宇萬伎(二三八一—二四三七)荒木田久老(二四〇六—二四六四)尾崎雅嘉(二四一五—二四八七)藤井高尙(二四二四—二五〇〇)松平定信(樂翁、二四一八—二四八九)等なり。

此の人々の著書には雅文の集に蒿蹊の『閑田文草』高尙の『松の舍集』『松の落葉』定信の『花月双紙』等あり。語法の書に魚彦の『古言梯』成章の『挿頭抄』『脚結抄』等あり其他、谷川士清(二三六七—二四三六)の『和訓栞』は辭書として、塙保己一(二四〇六—二四八一)の『群書類從』は一大叢書として最も記憶すべき者、則ち前者は主として語學界を益し、後者は洽く文學界史學界を利したり。世稍降りては、考證家伴信友(一四三三—二五〇六)類書家高田與清(二四四三—二五〇七)神道家平田篤胤(二四三六—二五〇三)同時に出でゝ三大家の稱あり、歌學者橘守部(二四四一—二五〇九)語學者僧義門(生歿年未詳)等亦其の頃の名家たり。此等は皆歌文を能くせざるに非ずと雖も、おの〳〵に別に心を專らにする所ありて、其の純文學に於ける貢獻に就きては、特に記すべき程のものあらず。但し與清が水戸家の命を以て編輯せし『八洲文藻』は、德川光圀の撰『扶桑拾葉集』の後を繼ぎて古來の名文を採錄せるもの『拾葉集』と共に雅文研究者の資すべきものたり。

第四節　小說

假名艸子　浮世草子　井原西鶴　自笑と其碩と　洒落本　稗史　山東京傳　曲亭馬琴『八犬傳』草雙紙　柳亭種彦　滑稽本　式亭三馬　人情本　爲永春水

小說は殆ど此の時代の文學の大半を領有するものなり。寛文の頃諸々の文學緒につくに當りて、既に假名艸子といふものありき。假名艸子は漢籍・佛經又は我が古文學等に見えたる珍說異聞を飜案して娯樂に供すると共に、一般の知識を啓發するを目的としたるものなり。故に其の作大抵敎訓六七分に世事三四分を加へ重に一廉の學者を以て世に許されたるものの一時の手すさびに成れり。鈴木正三(一二三九—二三一五)山岡元隣(一二二九一—二三三二)淺井了意(一二三五一歿)の如きは、即ち當時の作者の主なるものにして著書には正三の『因果物語』元隣の『誰が身の上』『小さかづき』了意の『御伽婢子』『浮世物語』等を最も出色とす。

かくて天和年間に至り、世態を寫すを以て旨とせる浮世草子といふもの世に行はれき。蓋し假名艸子の中にも、早く二三の書は世態の描寫に着眼して筆を染めたるも見ゆれど、一般に浮世草子として識認せられたるは井原西鶴の著作に肇まる浮世草子はまゝ敎訓若しくは怪談に涉るものありと雖も、大方は人情の描寫を主としたるものなり。其の作者には西鶴の外八文字舍自笑(一三二六—二四〇六)江島屋其碩(一三二七—二三九六)等最も名ありしものなり。

西鶴(一三〇二—一三五二)は大坂の人なり。西山宗因に從ひて俳諧を學び嘗て住吉の社頭に於いて一日に二萬三千句を吟せしを以て二萬翁或は二萬堂の稱あり。其著作には『一代男』『一代女』『五人女』『武道傳來記』『日本永代藏』『世間胸算用』『俗つれ〴〵』等傑作と稱せらる。其の筆鋒鋭利にして能く人生の秘奥を穿つところ優に本期文學の一大家たるに足るものあり。但し其の傑作中には寫眞の極文辭猥褻に涉りて讀むに堪へざる節多し。元祿元年五十一歲にて歿しぬ。西鶴の風體を傳へて亦能文の譽を得しものに西澤一風・錦文流(共に寶永・享保頃の人)の二人ありしが其の長所は寧ろ淨瑠璃に在りて小說家としては聊か後れて出でたる自笑・其碩に其の名聲を遜りき。さはれ小說の脚色一篇の中に首尾貫通する者は一風・文流に始まると謂ふべし。此の點に於ては自笑等は正しく承繼者の位置に立てるものなり。

自笑と其碩とは共に京都の書肆にして寶永・享保の頃榮えたり。其の著多くは二人の合作にかゝる西鶴物に模して材を採ること更に廣く、文を行ることますます流

暢世に之を八文字屋風と唱へて一時大に流行せり。其の著書數十部の中『百姓盛衰記』『風流諢平家』『世間息子氣質』『風流東大全』『風流西海石』『商人軍配團扇』等あり。自笑・其碩等の歿後、其の餘風を慕ふ者、其笑・瑞笑・等の名を以てあらはれしかど概ね先輩を模倣して京坂の小說壇は寶曆・明和の交に於いて其の終を告ぐるに至れり。

江戸には貞享・元祿の頃赤本と唱ふる草双紙の幼稚なるもの出で尋いで青本・黑本・など行はれしがいづれも繪畫を主としたるものにて、一に兒童の翫弄に供するに過ぎざりき。其の後平賀鳩溪、京阪の文學を移植するに及びて江戸の文學は著しき進歩をなせり。かくて天明の頃には戀川春町(二四〇—二四四九)明誠堂喜三次(ナ)(二三九五—二四七三)芝全交(二四五三歿)の徒出で、頻に詞壇に馳騁せり。其の著作は所謂黃紙の小冊子にして、亦挿畫を主としたれども寧ろ讀者を大人にとり、滑稽の想・洒落の辭頗る作者の力を徵するに足る。春町の『金々先生榮花の夢』喜三次の『文武二道萬石通し』全交の『鼻の下長物語』等は最も當時の嗜好に適したりといふ。然れども此の頃は未だ江戸作者の地位を高むるに至らざりき。寛政の初め烏亭焉馬(二四〇三—二四八二)山東京傳・曲亭馬琴・等の出づるに及びて江戸の小說家は忽ち春の

(ナ)明誠堂喜三次は歌狂師手柄岡持と同一の人也名は常富、通稱を平澤平格といへり。文化十年五月二十日歿享年七十九。

到りし趣あり。京傳は近世稗史の鼻祖と稱せらる。

山東京傳(二四二一—二四七六)は本名岩瀨醒、江戸の商賈の子なり。壯年の頃は放逸にして素行修まらざりしが、後には專心戲作に力め、文化十三年九月七日、五十六歲にして歿せり。著す所の書數十百部。就中、『本朝醉菩提』『稻妻表紙』『雙蝶記』等最も行はる。又別に『近世奇跡考』及び『骨董集』の著あり。當時小說の作者は大抵狹斜の事情を描ける所謂洒落本を物せざるはなかりき。京傳も最初は此の種の著述に筆を染めて、一時頗る流行したりしが、後には其の非を悟りて再び之を書かざりき。おもふに洒落本は浮世草子の變遷し來れるものなり。これはかれに比ぶれば一層猥陋なる所ありしを以て寛政三年官より其の發行を嚴禁せられたり。京傳の門に出でゝ出藍の譽あるものを曲亭馬琴とす。

曲亭馬琴(二四二七—二四〇八)姓は瀧澤名は解江戸の人にして別號を著作堂主人・簑笠漁隱・玄同陳人・とも呼びたり。初め旗下の士に事へ尋いで醫を學び又儒を學びしかども並に志を得ず、後京傳の許に寄食して終に小說を以て世に立ちたり。馬琴壯時より讀書を好み洽く和漢の典籍を涉獵したりき。其の業に從ふや亦勵精刻苦衆に超え六十年の久しき把管一日の如く、著はすところの書二百六十餘種あり。晩

年明を失ふに至りしかども尙ほ著作を廢せざりき。嘉永元年十一月六日、八十二歳の高齡を以て逝きぬ。小說には『南總里見八犬傳』『椿說弓張月』『近世說美少年錄』『夢想兵衞胡蝶物語』『三七全傳南柯夢』『俊寬僧都島物語』『朝夷巡島記』等最も傑作の聞えあり。隨筆には『玄同放言』『羇旅漫錄』『燕石襍志』『簑笠雨談』『著作堂一夕話』『雜烹の記』皆名高し。

馬琴の小說は從來のとは異なりて必ず一定の理想其の中に貫通せるものあり。所謂勸善懲惡の主義是なり。故に其の脚色、措辭は爾餘の小說の如く蕩逸浮靡に涉ることなしと雖も往々不自然に流れて道義的觀念に肉を附したるが如き弊少からず。然れども其の文章の優麗なると結構の雄大なるとは正しく馬琴をして大家の名を爲さしむるものなり。即ち其の文は和漢雅俗を融和して口調流るるが如く其脚色は紛糾複雜にして千態萬狀の人生を掌上に弄する概あり。文勢の緩急疾徐能く叙述の事體に應じて變化自在なるは更に才藻の富贍なるを思はしむ。隨筆日記等の文また誦すべし。

馬琴が稗史を以て小說壇上の一方に雄飛せると略、時を同じうして他方には草雙紙及び滑稽本と稱するもの行はれ寬政の禁弛ぶにつれて亦人情本と稱するもの行はれたり。其の作者の有名なるもの草雙紙に柳亭種彥・滑稽本に式亭三馬・十返舍一九・人情本に爲永春水の輩あり。

柳亭種彥(二四四三?—二五〇二)は幕府の士にして高屋知久といへり。博學にして文才あり、戲作に從事して著書九十餘種におよびぬ。其の中最も世に行はれたるを『偐紫田舍源氏』とす。脚色は『源氏物語』の飜案なる者から、行文平易にして流暢、淨瑠璃に八文字屋風を折衷したるが如し。此の外小說に『正本製』『邯鄲諸國物語』隨筆に『還魂志料』『用捨箱』等亦有名なり。天保十三年七月十九日歿しぬ。享年六十(?)。

式亭三馬(二四三五—二四八二)は江戸の人にして菊地泰輔といへり。文章を草する驅るが如く滑稽諧謔湧くに似たり。著書百餘篇『浮世風呂』『浮世床』の二篇殊に賞せらる。十返舍一九(二四二四—二四九一)は重田貞一といひ駿府の胥吏の子なり。資性磊落吏事を好まず、江戸に出でゝ操觚の人となりぬ。亦諧謔に長じ著するところ甚だ多く『道中膝栗毛』『常夏物語』以下無慮三百餘種に上れり。其中『道中膝栗毛』最も行はる。一九と三馬とは滑稽小說の作者として其の時を同じうし、其の名を等しうせりと雖も、兩者各得失ありて一九は寧ろ落想の奇を以て優り、三馬の觀察の精を以て長ぜるが如し。但し泛々たる小著述には、兩者ともに拙速を貴べるが如し。

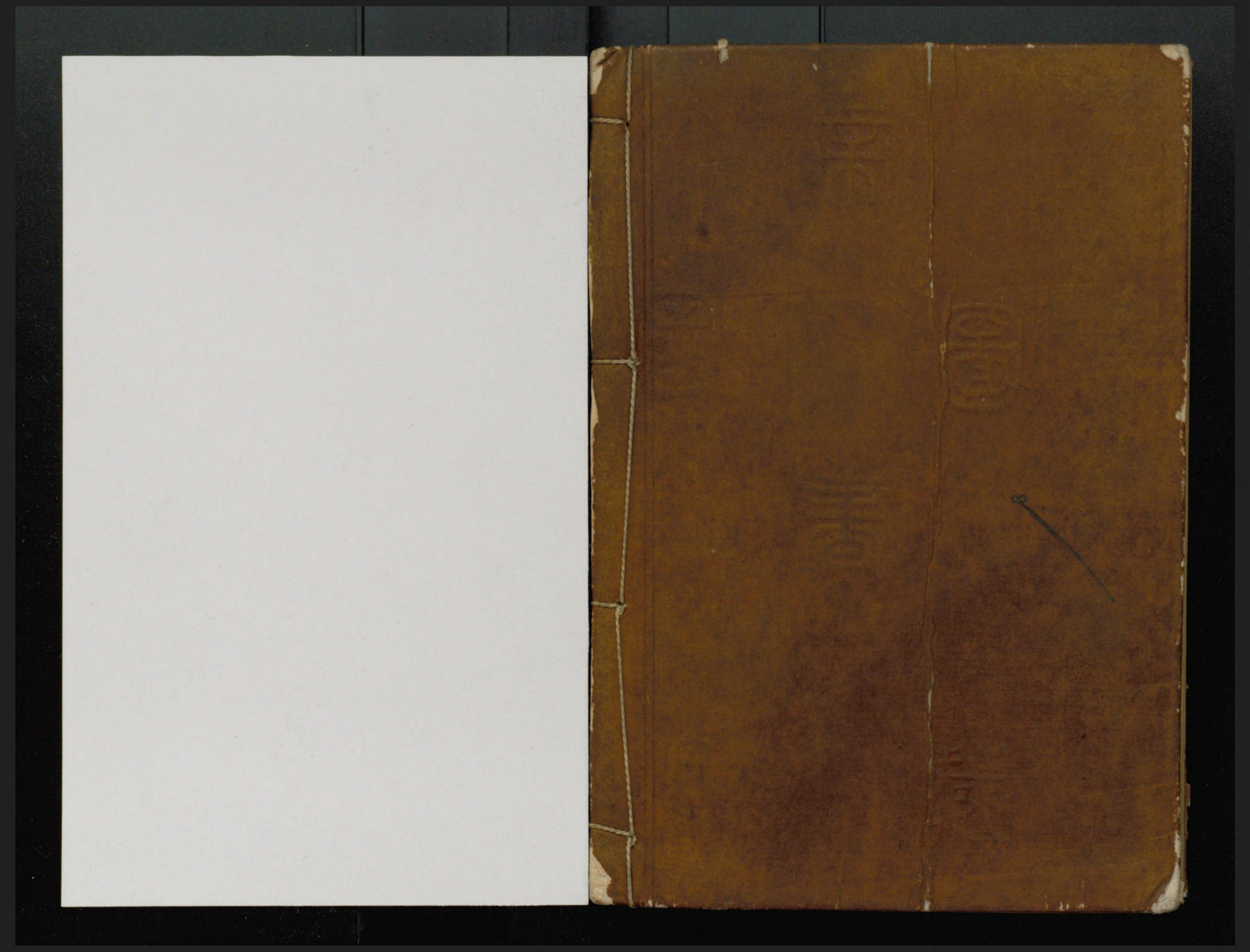
爲永春水(二五〇二歿)は敎訓亭とも號せり。姓は佐々木、名は貞高、亦江戸の人なり。寛政の禁漸く弛び、人情の浮靡に赴くに乘じて、所謂人情本の一派をなせり。蓋し人情本は古の洒落本より脫化したるものなり。其の著數十種『梅曆』『辰巳の園』『伊呂波文庫』等一時大に行はれしが着想行文ともに卑陋にして動もすれば風紀を紊す恐れありしを以て、天保十三年官より絕板を命ぜられ、其の身は罪に處せられたり。

是等の人々の外、小說界に筆を執りたるもの甚だ多く、稗史には山東京山・小枝繁・栗枝亭鬼卵等あり、滑稽物には感和亭鬼武・岡山鳥・瀧亭鯉丈・梅亭金鷲等あり、人情本には曲山人・松亭金水等あり、草雙紙には東西庵南北・墨川亭雪麿・墨春亭梅麿・二世焉馬・式亭小三馬等ありしが、概ね千篇一律愈出ていよ愈拙く殊に草雙紙に至りては表紙及び卷中の繪畫に助けられて、僅に兒女の眼を牽くもののみ多かりき。但し、京山・鬼武等の二三者は、此の間に在りて、聊か出色あるものとす。かくの如くしてかの焉馬以下六大家の建立せし江戸の小說壇は幕府の末造に於いて、亦土崩瓦解の悲運に陷りたり。

俳文『風俗文選』榎井也有『鶉衣』狂文　風來山人等の狂文作者『六々部集』

元祿の頃より俳諧の隆盛につれて俳人の間に一種の小品文行はれたり。其の文簡潔にして幽玄、洒落さながら俳諧が簡單なる語句の中に深遠なる想を含蓄するに似たり。世に之を俳文といふ。芭蕉・支考・許六をはじめ俳諧を能くせしもの大方之を作らざるはなかりき。但し芭蕉の作を除き一般の俳文は俳句よりも滑稽の分子を含むこと多し。許六の編せる『風俗文選』支考の編せる『本朝文鑑』は倶に當時の俳文を集めたる書なり。かくて、寶曆の頃に至り、横井也有(二三六二—二四四三)俳文の名家としてあらはれぬ。也有は尾張の重臣にして名を孫左衞門といへり、作る所の俳句眞率にして一家の妙を得たり。其の著述に『鶉衣』『浦の梅』『野父談』『羅葉集』『小皮籠』等あり。就中『鶉衣』に收むる所の俳文は概ね輕妙・快利にして落想の奇殆ど人意の表に出づるものあり。蓋し曠世の文といふべし。也有以後の俳文に至りては平凡にして殆ど觀るに足らず、皆樣に依りて胡蘆を描くの類なりき。

狂文は狂歌師・戲作者等の好みて作りたるものにして亦滑稽諧謔を主とせる種の

315
53

小品文なり。其の俳文の異なるは題目・言辭・共に一層卑俗なるに在り。狂文の作者として最名高きを風來山人・手柄岡持・蜀山人・宿屋飯盛・北川眞顏・芍藥亭長根・等とす。風來は平賀鳩溪の別號なり。其の狂文の集を『六々部集』といふ。詞思共に野卑を極めたりと雖も滑稽の中に滿腔の不平を寓して嘲罵を恣にするところ、往々人の肺肝を穿つ者あり。岡持・蜀山・等の文は、滑稽を主として多く惡意を含まず、殊に蜀山の作には飄逸にして文致殆ど俳文の域に入らむとする者あり。蜀山は、俳文家也有に私淑せりといへば想ふに其の風情を傳へて更に諧謔の素を加へたるものなるべし。文集に『四方のあか』『四方の留粕』等あり。岡持の『我おもしろ』飯盛の『あづまなまり』長根の『芍藥亭文集』亦奇什に乏しからず。滑稽小說の作者として知られたる一九・三馬・等が狂文を能くせしことは其著書の狂文等に就きて知るべし。